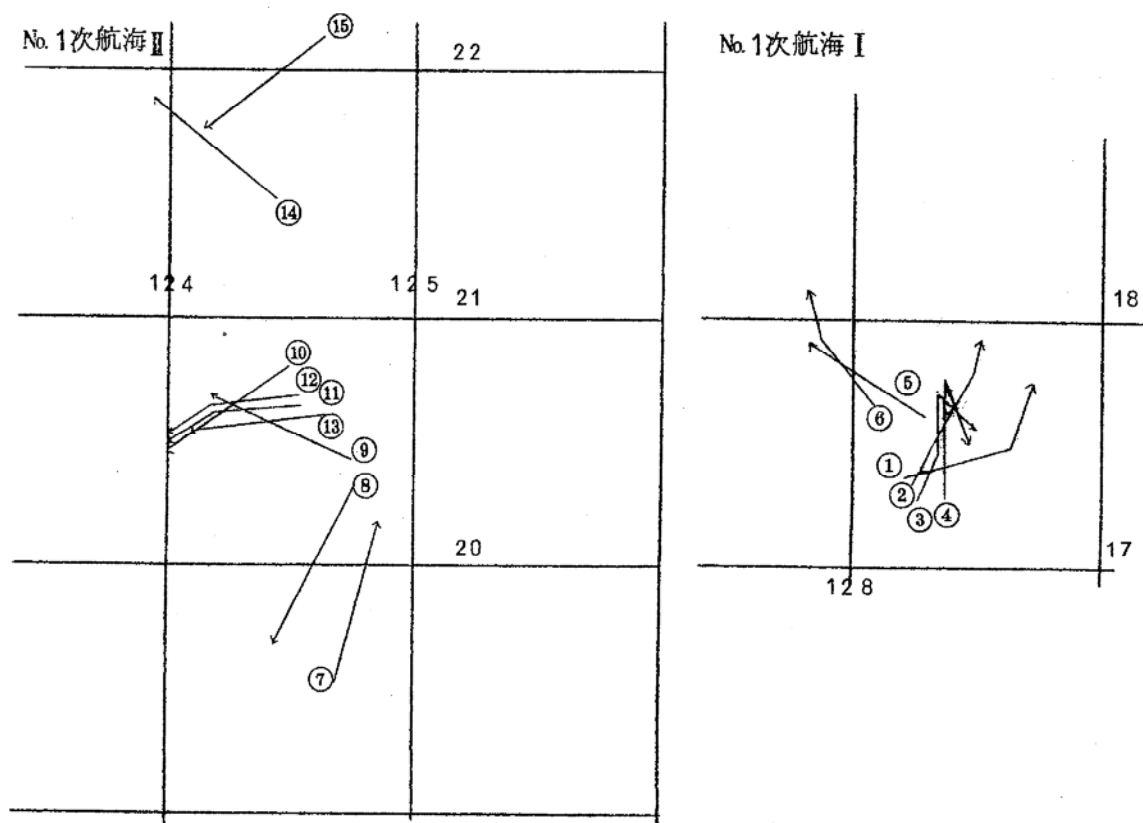


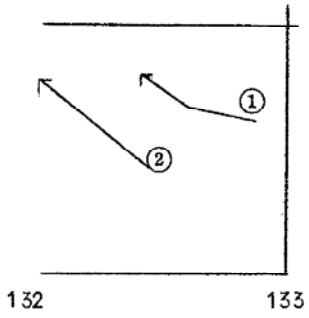
イ 漁 場

漁場の選定については、調査目的により指定された海区内において、多年の漁場調査から得た経験と同海域に出漁している漁船の漁況情報を解析し、海洋観測結果を参考とした。漁場位置を航海別に図示した。(才1図)

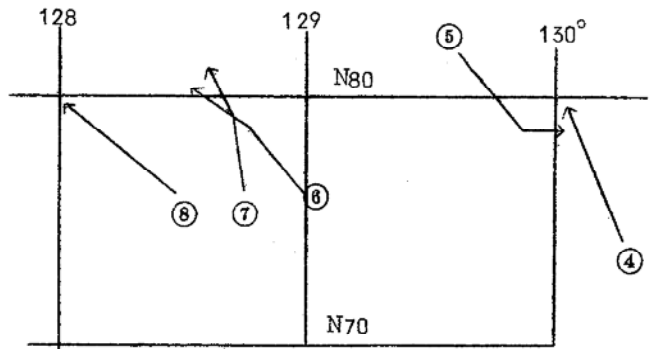
第 1 図 漁場調査位置



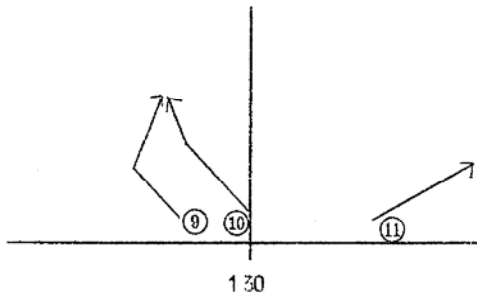
才 4 次航海 1



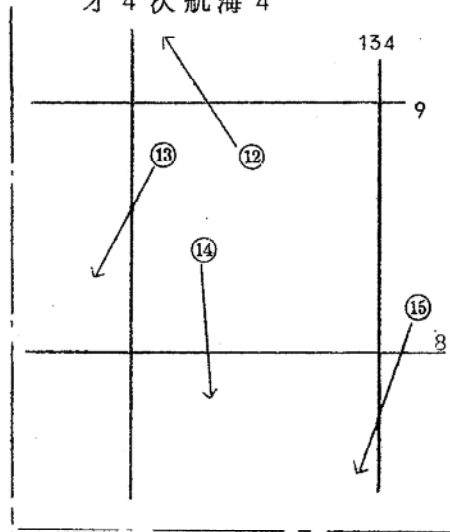
才 4 次航海 2



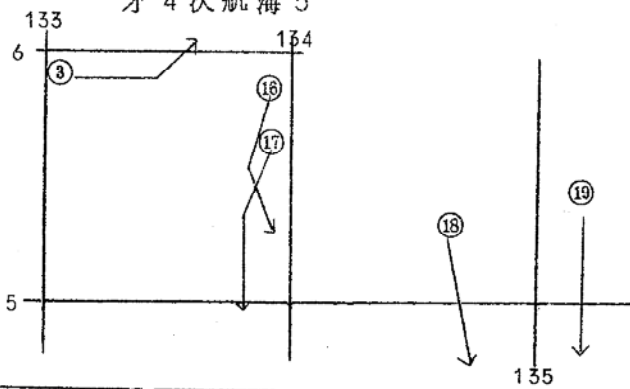
才 4 次航海 3



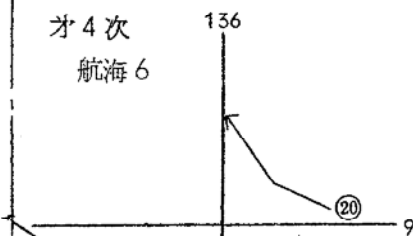
才 4 次航海 4



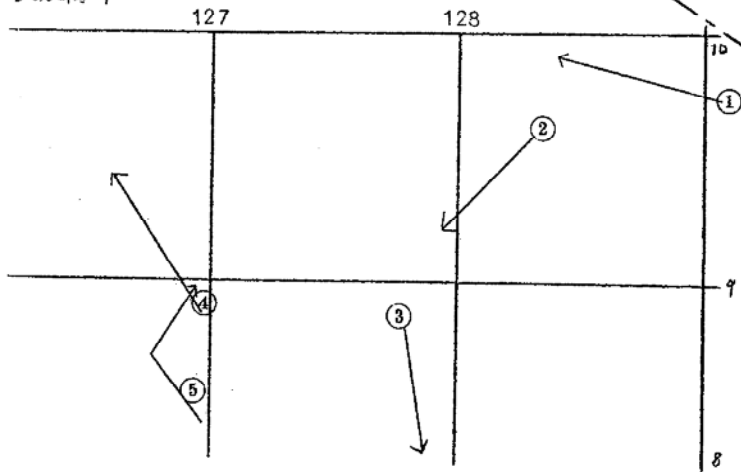
才 4 次航海 5



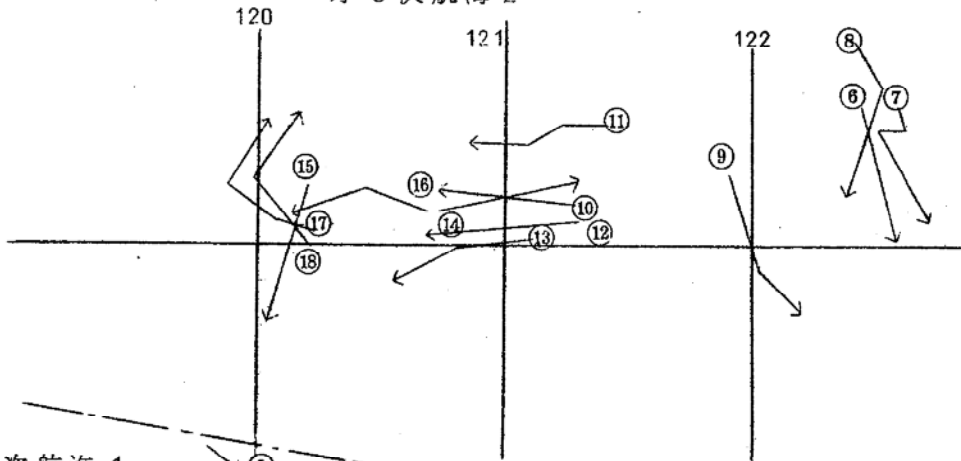
才 4 次航海 6



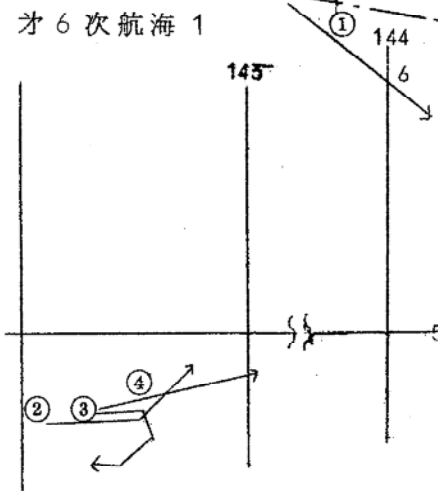
才 5 次航海 1



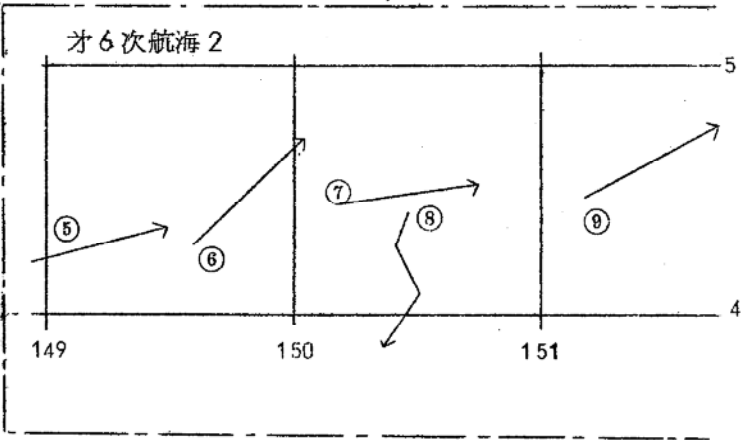
才 5 次航海 2



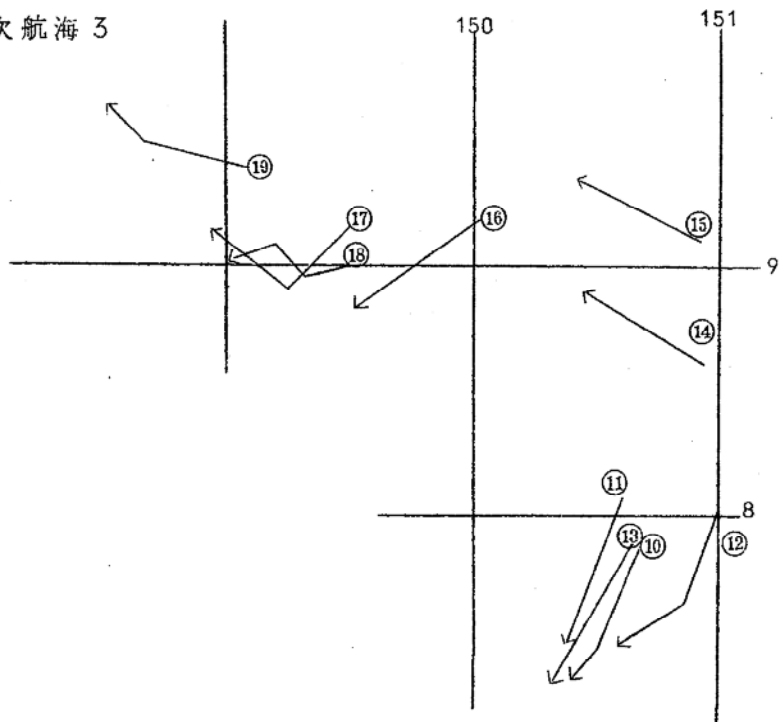
才 6 次航海 1



才 6 次航海 2



才 6 次航海 3



ウ 体長組成

まぐろ、かじき類の航海別、魚種別、体長表は才5表のとおりである。

キハダは才5表の1である。 メバチは才5表の2である。

クロカジキ、シロカジキの体長表は才5表の3である。

才5表-1 魚種きはだ 航海別体長分布表(マグロ類)

体長 航海 回数	80	81								91								101								111								111							
		3	5	7	9	3	5	7	9	3	5	7	9	3	5	7	9	3	5	7	9	3	5	7	9																
1		1		1						1		3		2	4					9	20	23	18	19	3	3	3	2	8	6	11	9	20	16	3	4	2	6	2	5	3
2				1											1					4	5	13	24	37	22	9	6	7		5	1			2	2	4	10		2	1	
3		1			1	3									2					4	9	14	12	29	26	30	22	15	21	18	2	4	13	21	31	25	3	5	2	1	6
4							1		3					2	6	16	21	17	20	5	11	10	4	3	5	10	26	25	35	19	2	6	16	21	17	20	7	14	11	9	11
5	16 12 5	4	3	5	4	7	4	9	6	5	8			2	2	2	4			9	8	13	40	32	38	28	13	18	15	28	1	3	5		3	6	14	15	19	16	12
6	20 1 15	25	24	25	19	4	4	4	4	1	5									4	6	8	20	28	44	15	13	22	22	24	1	1	3	6	12	10	5	21	18	32	
		9	14	16	11	3		2	3	3	2									2	4	2	1	2	7	9	13	14	14												

才5表-2 魚種めばち 航海別体長分布表(マグロ類)

体長 航海 回数	80 以下	81								91								101								111								111							
		3	5	7	9	3	5	7	9	3	5	7	9	3	5	7	9	3	5	7	9	3	5	7	9																
1																																									
2															1				1	1	1	2	1	2		2	2		2												
3																																									
4																																									
5																																									
6																																									

性別不明のものは点線の上に記入する

131										141										151										161					計
3	5	7	9		3	5	7	9		1	2	4	2		3	5	7	9		3	7	7	9		3	5									
3	10	15	16	13	10	10	5	5		1	2	4	2															1				243			
3	10	6	7	7	4	1				1	1																	1				130			
6	21	13	21	38	27	18	15	12		7	2	5	2	1	1													323							
	1	4	1	2	1						1																	33							
15	9	12	10	8	6	5	2	4		2																		186							
20	27	16	14	17	17	7	5	3		5	2	2	1															343							
	1									1																		3							
13	12	11	6	7	1	2		1		1																		192							
22	12	15	23	15	15	10	9	4		3	3	2	2	2														308							
20	12	4	8	5	7	2		1		1	1																	165							
37	49	43	31	26	15	5	7	4					1		1													532							
2	3			1																								28							
4	14	5	4	2	1	1				1																		298							
25	29	20	17	7	10	9	6	7		1	1																	375							
		4	1																									19							
16	8	5	8	5	2		1																					191							

性別不明のものは点線の上に記入する

131										141										151										161					計
3	5	7	9		3	5	7	9		3	5	7	9		3	5	7	9		3	5	7	9		3	5									
		1																														2			
		1					1																					1				3			
2	2	2	1	2	1	2		1				3		2														48							
1	1		1		2	2						1																1				18			
1	2	1	1	1	2	1	1	5			2	2	3	1	2													39							
1	2	1				1	2				1																	1				24			
		1	3	1	2	1				1			1		1		1										20								
2	1		2	3				1							1													20							
1	1	1	1	2	2	1	2	4		4	3	3	2	1		2									1			44							
							1						1															3							
1		4	3	3			5						1															30							
	2		3	1	2	3	1	2		1		2	1	2	1	1												28							
2		3	2	2	4	4	1			1		1	1	1														32							

表5表-3

黒皮……上段
白皮……下段

日別体長分布表 (カジキ類)

体長 操業 次数	51	56	61	66	71	76	81	86	91	96	101	106	111	116	121	126	131	136	141	146	151	156	161	166	171
1 黒 白																1	2	2	4	11	9	13	11	12	1
2 黒 白																			3	7	12	12	10	8	5
3 黒 白													1				1	4	1	7	15	12	10	4	6
4 黒 白									1		1							1	5	2	4	2	8	1	1
5 黒 白																				1	2	1		1	1
6 黒 白																		1		1	1			2	
												2	2	2	1	3	3	3	7		12	12	6	1	5

176	181	186	191	196	201	206	211	216	221	226	231	236	241	246	251	256	261	266	271	276	281	286	291	296	合計
2	2	1	1			1		1																	74
3	6	1			1	1		1																	70
		3	1	1	2	3	2	1											1						75
						1														1					4
1					1		1						1												30
			1	1					1							1									4
1	1	1	1	1							1														15
1	1		1	1	1				1		1					1							1		14
1		1		1				1		1															64

(5) 本年度実施した航海別水揚状況

本年度に実施した6航海分の水揚状況を総括するとオ6表のとおりである。

航海別、魚種別、水揚キロ数および金額 (才6表)

航海次数		1		2		3	
水揚港		焼津	三谷	焼津	三谷		三谷
月	日	6月1日	6月2日		7月17日		10月12日
まぐろ	kg 金額	4,352 1,072,219	556 63,000	—	—		—
きはだ	"	6,175.8 865,727	2,335 353,200	6,635.8 951,304	8,671 1,556,700		112,921 1,994,250
めじ	"	—	—	—	—		89 6,500
めぼち	"	153.2 44,166	38 4,800	877.2 105,898	998 177,100		2,282 454,200
だるま	"	—	—	—	—		—
ひんなが	"	83 8,715	15 1,500	105 5,645	66 7,260		116 9,500
くろかわ	"	2,281.6 396,492	1,220 211,500	2,158 386,250	1,394 300,500		4,106 852,000
しろかわ	"	72 10,800	—	—	—		469 70,000
めかじぎ	"	143 18,760	—	—	42 5,000		—
まかじぎ	"	154 27,750	—	40 7,000	—		—
ほせう	"	2,435 176,267	2,216 183,000	1,041 77,756	1,289 112,500		906 71,500
さめ	"	—	—	—	74 4,000		39尾 49,800
雑魚	"	2,390 80,860	1,475 70,700	613 22,942	1,271 97,850		92尾 31,400
計	kg 金額	18,204.6 2,689,576	8,055 887,700	11,470 1,556,796	13,805 2,260,910	—	20,889 3,540,200
さめひれ	35kg 12,180円			41 16,400			—
平均単価		182	120	148	183		170
総水揚金額		3,589,456		3,834,105			3,540,200

4		5		6	
焼 津	三 谷	焼 津	三 谷		三 谷
12月8日	12月9日	2月1日	2月2日		3月26日
—	—	—	—		—
9,036	3,454	12,132.6	7,865.7		9,818
1,774,699	641,200	2,128,840	1,345,911		1,812,500
—	—	—	409		1,868
—	—	—	49,700		230,950
949.4	560	1,538.2	1,597		2,478
157,140	103,300	278,456	331,300		601,000
—	—	—	—		19
—	—	—	—		1,800
—	—	17	—		—
—	—	1,530	—		—
1,064	582	509	505		2,891
244,875	154,500	89,525	125,000		653,000
545	—	446	868		44
125,865	—	51,810	195,000		13,000
—	—	181	134		34
—	—	17,900	14,800		5,500
—	—	—	—		27
—	—	—	—		5,000
406	118	—	479		289
46,271	13,000	—	66,500		43,500
—	52尾	—	—		64尾
—	71,900	—	—		125,850
—	85尾	—	381		120 本 +145尾
—	75,400	—	15,300		71,200
12,000.4	4,714	14,823.8	12,238.7		17,588
2,348,850	1,009,300	2,568,061	2,143,511	—	3,567,300
174	—	81	—		—
75,805	—	41,904	—		—
199	195	173	179		201
3,433,955		4,753,476		3,567,300	

2. 深海底刺網漁業試験

本県の主幹漁業である中型および小型機船底曳網漁業の夏期閑漁期対策として、深海漁場の積極的な開発、深海漁業の導入、深海魚族資源の高度利用および底曳網漁業の安定をはかるために、昭和38年度に引続き深海底刺網漁業試験を次のとおり実施した。

(1) 試験期間

昭和39年6月～8月

漁具整備と仕立作業 6月22日～7月8日

試験操業期間 7月9日～8月11日

(2) 試験船と乗組員

試験船 沖合底網漁船 幸栄丸 36.05トン 150馬力

乗組員 幸栄丸船長 牧原仲蔵ほか12名

調査船 愛知県水産試験場技師 2名

(3) 試験漁場

静岡県御前崎沖合から和歌山県勝浦沖合に至る海域

(4) 試験漁具

けいそん中古網 30反(新規購入分)

アマラン 15本×18.75cm(網目)×6m(網丈)×90m(網長)

昨年使用した古網 19反

アマラン 15本×16.5cm×6m(網丈)×75m(網長)

以浅でも漁獲されなかつた。

月令との関係については、いずれも月令 1.3～2.3、25.6～26.6で新月の間がよかつた。

めだい、はちびき等漁獲尾数の多い魚種のいずれも、羅網する箇所は 1部にとどまるので、1張の反数を多くするよりも、張数を多くして、操業箇所を増す方が有利であり、1張の反数は 15反から 20反に止めた方がよい。

渥美外海沖合に漁場形成の見込がないとは断定できないが、同海域は魚探映像から判断して大陸棚汐深の海域は急斜面でかつ海底地形が極めて複雑であること、沖合底曳および深海(中型)底曳業者の体験から、深い漁場での漁獲は期待できないということから、現在の未利用海域での底刺網漁業の見透しは少ない。しかし、北海道、東北海域では、水深 600m 汐深の漁場で、めぬけが漁獲されており、渥美外海での同水深海域にめぬけ分布が把握されていないことから、同漁場での底刺網の操業不能を決論づけることはできない。

3. 深海底魚一本釣漁業試験調査

県下の主要な漁船漁業である、機船底曳網漁業の夏期閑漁期対策および転換漁業対策として、深海漁場の積極的な開発を目的に漁場調査と深海底魚一本釣の漁業試験を実施した。

(1) 調査試験の概要

調査試験期間 昭和39年8月3日～8月11日

航海日数 9日間

操業調査日数 7日間

調査漁場

御前崎沖合 金州の瀬

石廊崎沖合 ひょうたん瀬

八丈島 黒瀬

八丈島 島周辺漁場

青ヶ島 //

鳥島 //

調査水深 40～300米

(3) 調査船の概要

漁業試験船 海幸丸 99.65トン 300馬力

乗組員 調査員1名 船長以下18名

(3) 漁業試験の概要

金州の瀬では深海底刺網漁業試験と並行して調査する。底刺網でとる漁獲物、メダイ等は釣では釣獲されず、わずかにキンメダイ、アカハタ、ハナフエダイ数尾釣獲された。

陸岸からも近く相当数の漁船が入り次第に荒廃し魚類が減少している感を深くした。

ひょうたん瀬、黒瀬共調査をこゝろみても海流速く操業できず、八丈島、青ヶ島調査は荒天になつたため風かけの浅水深を調査し深い水深の所では船の流れが激しく操業困難であつたが、魚獲物少く小型魚であるため予期した水揚をあげることはできなかつた。

鳥島周辺漁場

日出前より日没後までを、2日間にわたり水深40m~300mにかけて調査を実施した。漁獲物は浅水深では、シマアジ、ウメイロ、アカハタ、アオハタ、等で尾数では相当釣獲されたが岩礁地帯に多く平坦な所では少い漁獲であつた。

水深200~300mでは、アオダイ、ハマダイ、ヒメダイが釣獲されたが、乗組員が素人のため操業が円滑さを欠き、成績をあげられなかつたが、操作次第では相当有望と見受けられる。

(4) 他船の操業状況

鳥島以北の八丈島、青ヶ島、黒瀬、ひょうたん瀬、金州の瀬では他船は見られなかつたが、鳥島周辺漁場および鳥島には数隻の船が操業し、かなりの好成績をあげるのが望見された。

(5) 漁具構造

幹 糸	テロンナイロン	70号	300m
幹 テグス	5分柄ナイロンテグス		30m
	同テグスに2~3勿鉛を600g前後取付ける。		
釣元テグス	4分柄ナイロンテグス		10~12m
板 テグス	3~4分柄ナイロンテグス	1m~1.5m	6~8本
釣 針	5~8cm (タルメ釣)		6~8本
重 石	1~1.2kg		1ヶ

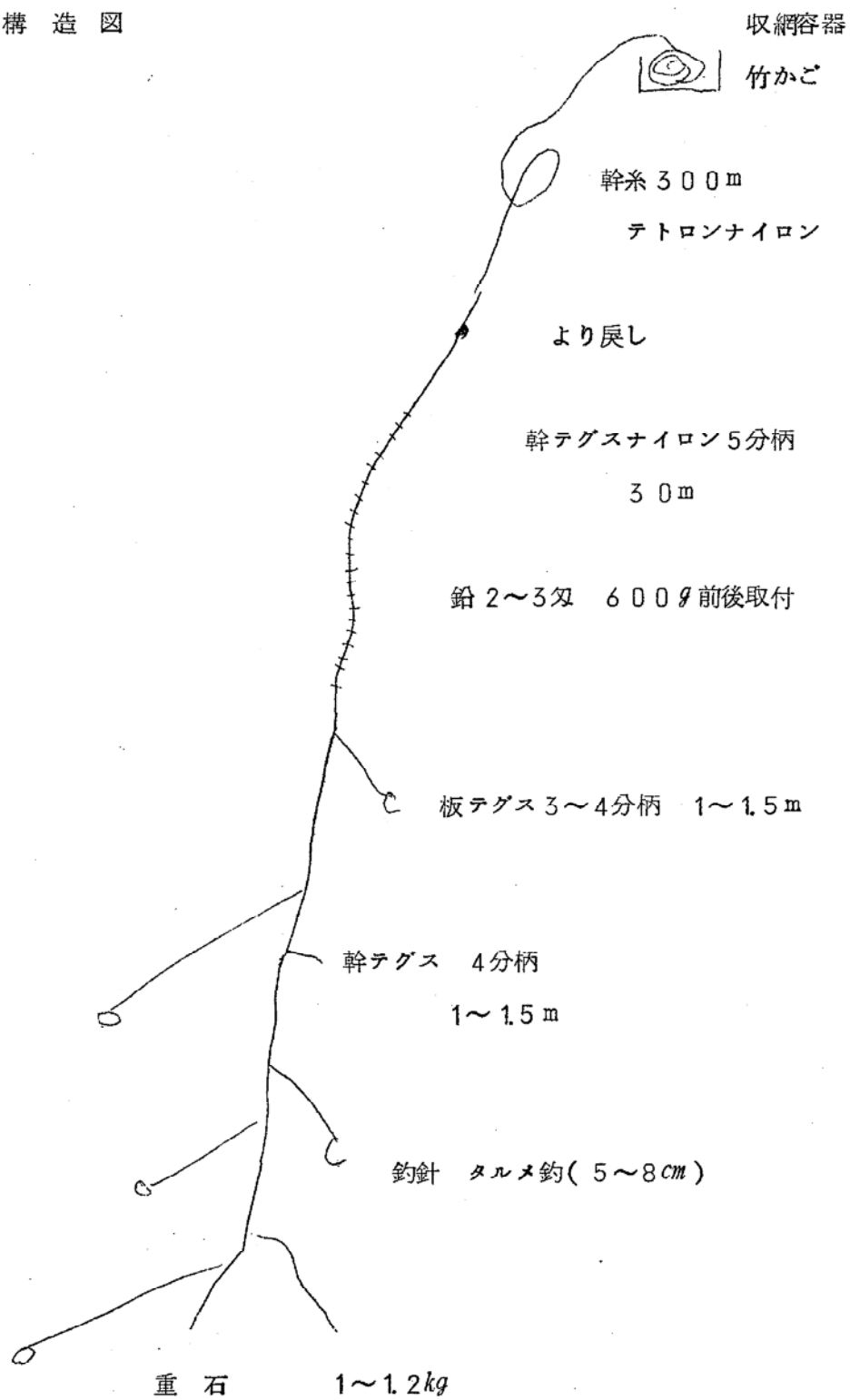
以上の構造で用意したが、操業途中船員がふなれたため鉛付部分を取はずし使用した。

また鉛付の部分より下を取替てテンビン仕掛にかへて使用したが浅所では釣獲には変化が

なかつた。

改良した魚具では浅層水深のみで深い水深では使用不可能であつた。

構造図



(6) 操業方法

目的の場所に到着したら機関を停止して潮、風に流して操業する、船首より等間隔に10～12人並びに釣糸をたれ魚のかゝるのを待ち、魚がかゝれば揚げ各人自由に行動した。

餌料には、サンマ、イカを使用しサンマは1尾3～4分切にし、イカは短冊型に切り1本の釣に1～2切を付ける。

重石を海底につかせて浮上しないように操作する。魚の多くかゝった所を確認し船を汐上りさせ操業をくり返す。

(7) 漁場並びに漁獲物

魚種別漁獲水深

総体的に瀬付魚は水深の急斜面から平坦部に移る角地に多く群生しておりこの部分を釣針が通過する時間を長くするように操船すれば成績向上が得られる。

ハタ類、ウメイロ、メジナ	40～60m
アオダイ、アオハタ	80～150m
ハマダイ、ヒメダイ	180～300m

(8) 調査成績水場表

別紙成績表のとおり

底魚一本釣調査

出港月日 昭和39年8月 3日～入港昭和39年8月11日

水揚月日 同 8月12日 三谷港

航海日数 9日間 操業日数 7日間

調査漁場 金州の瀬、ひょうたん瀬、黒瀬、八丈島、鳥島周辺漁場

調査水深 40m～300m

調査試験成績表

月	日	8月3日	4日	5日	6日	7日	8日	9日	計
漁	場	金洲	ひょうたん	黒瀬	八丈島	八丈島 青ヶ島	鳥島	〃	
調査	水深	60~80	100~200	130~140	40~100	40~60	40~120	40~270	
操業	開始	21~15	16~00	07~30	05~50	05~30	11~00	05~50	
操業	終了	4日 06~00	22~00	08~20	17~00	10~00	19~00	18~00	
漁	ハタ類	8			11	13	25	37	79
	チオメキントキ	1	1					2	4
	ハナフエダイ	1	3					4	5
	クロムツ								3
	アオダイ							21	21
	シマアジ				1		4	12	17
獲	メイチダイ				2			1	3
	ウメイロ				1		49	24	74
	ヒメダイ							3	3
物	シマハタ						10		10
	ハマダイ							5	5
	その他				2	8	33	12	55
	サメ				8				8

水揚状況

魚種名	尾数	売却価格
しまあじ	12	18,000
かんばち	2	1,000
うめいろ	39	21,650
はた類	26	18,300
あおだい	14	8,000
その他	8尾 8山	4,950
計	102尾 + 8山	71,900

4. のり、わかめ優良種苗培養事業

(1) のり優良種苗

ア 果胞子付け

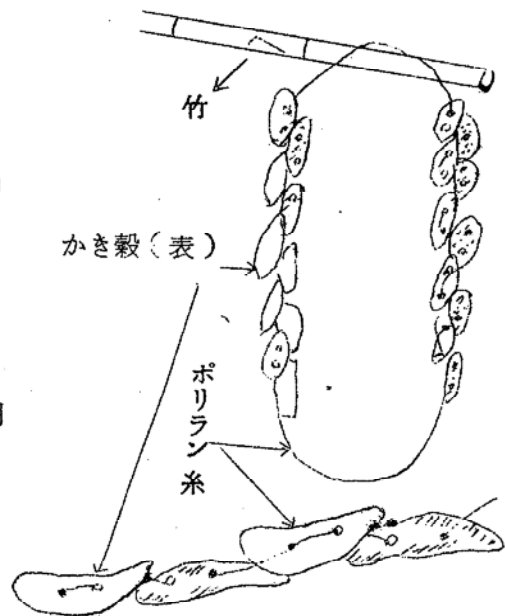
過去の結果からみると吊下方式での大量培養を行う場合、果胞子付け時期が遅れると秋期の単胞子放出が遅れたり、あるいは少なかつたりする傾向が見られた。これは果胞子付けが遅れた場合、短期間に糸状体を成長させる必要があるのに吊下方式での密培養ではそれが出来ず、成長成熟が遅れるからである。従つて本年は例年よりも果胞子付けを早期に行い糸状体を充分に成長成熟せしめ効率の良い上質の糸状体を作成供給するようにした。果胞子付けの日時、原藻産地(種類)及び生産枚数等は表1の通りである。なお果胞子付けの方法は例年通りで、洗滌したかき殻の内面を上に向け、海水を約10~20cm深に張つて、その上にボールミルで粉碎したのり葉体の液(果胞子液)を撒布した。

表 1

回数	月日	産地	枚数	備考
1回	11月29日	老津(主にアサクサノリ)	2,000	100×1 1~4ヶ
2回	12月13日	万石浦(")	6,500	" 0~1
"	"	松川浦(")	11,000	" 1~2
3回	12月26日	鳴門(アサクサノリ)	5,500	" 0~1
4回	1月18日	" "	4,500	果胞子付不良
5回	1月27日	" "	(4,500)	4回分再種付1~3
"	"	水呑 "	2,000	100× 1~2
6回	2月10日	島原(主にスサビノリ)	4,000	" 2~5
7回	2月21日	牟呂(")	3,000	" 3~5
計			38,500	

イ 培養経過

果胞子付後2日において糸状体貝殻の連結を開始し、順次吊下していった。吊下法は貝表面に3mm²位の小孔を2ヶ、縦に約5cmの間隔であけ、これを図のようにポリラン糸で縫って連結したものを約3m×6cm径の竹に30連ずつ吊下した。培養期間中の水槽における水温、及び比重は才2表のとおりであった。各期とも上下反転は月1~2回行い、又、水槽掃除は1~4月迄は2カ月に1回、5~9月は毎月1回ずつ行つた。なお、その際水槽及び海水は次亜塩素酸ソーダで消毒した。また、培養期間中、毎日1~3時間海水を循環し、光線は培養槽上面にある白黒のカーテンを天候に従つて適宜調節した。



ウ 糸状体配布

9月上旬検鏡時には子裏の形成著しく、恒温室での実験では、18℃で入室後3日目には多数の胞子落下が見られ、成績は良好であった。9月28日~30日に才3表のように県下各漁協へ生産した糸状体を分譲配布した。

才 3 表

漁 港 名	数 量	漁 港 名	数 量
形 原	5,350枚	鳥 羽	1,470
幡 豆	4,950	寺 津 平 坂	5,700
味 沢	10,500	田 原	1,000
前 浜	2,000	計	35,070
塩 津 蒲 郡	3,100	水 試 使 用 分	3,430

総 計 38,500

表 2 培養槽観測 (3 8 . 1 2 ~ 3 9 . 1 1)

月	旬	水 温	比 重	月	旬	水 温	比 重
3 8	上	12.0	2 2.5	6	上	19.8	2 3.1
	中	10.5	2 2.5		中	20.8	2 0.9
	下	9.3	2 2.4		下	21.9	2 1.3
3 9	上	8.3	2 2.8	7	上	24.8	1 7.6
	中	8.5	2 2.6		中	26.0	1 7.5
	下	7.7	2 2.6		下	25.8	1 7.9
2	上	7.2	2 2.0	8	上	26.9	1 7.8
	中	6.8	2 2.7		中	26.3	1 8.1
	下	6.8	2 3.5		下	26.4	1 8.6
3	上	9.3	2 4.0	9	上	25.8	1 9.1
	中	9.3	2 4.4		中	24.8	1 9.5
	下	9.4	2 4.5		下	22.3	1 9.6
4	上	14.0	2 3.0	10	上	19.5	2 0.3
	中	18.2	2 1.9		中	17.2	2 1.5
	下	17.7	2 2.2		下		
5	上	18.2	2 2.5	11	上	15.1	1 1.0
	中	18.1	2 2.6		中	13.2	2 0.9
	下	19.3	2 2.7		下		

(2) わかめ優良種苗

わかめ養殖の普及を目的として本場でわかめ種苗を生産し、希望組合へ配布した。

ア 培養期間 昭和39年5月15日～11月25日

イ 游走子付月日、及び種苗(根株)産地

才 1 回	5月15日	佐次島
才 2 回	5月20日	宮崎
才 3 回	6月2日	三谷

ウ 数量

クレモナ20番手36本糸 10,000m

(60cm×90cmビニール枠 1枠に100m巻きつけたもの100枠)

エ 游走子付

游走子付けは才1～3回ともに良好で、100×1視野5～10ケの游走子がみられた。培養水槽に10～20cm海水を吸み入れ、根株を投入し、海水白濁後、糸枠を浸漬した。約30分静置後、新たな水を吸み入れた別の水槽へ吊下培養した。

オ 培養の経過

吊下後は殆んど止水で培養し、週に1度海水を注入、入れ換えた。配偶体発芽は順調で1cm当り約10～50ケ、あるいはそれ以上の配偶体がそれぞれにみられた。6月以降9月までは月に2回の割りて上下反転を行い、上下による配偶体生長の偏差をなくするよう努めた。9月に入つて気水温の降下が早かつたので、早期採取を目的として9月14日に芽出し処理として海中吊下した。

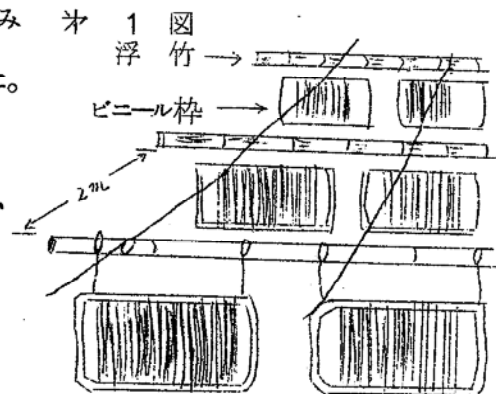
カ 芽出しの処理

9月14日、三谷東前地先水試前漁場へわかめ枠をそのまま吊下した。方法は才1図の通りである。芽出前の検鏡では未だ芽胞体はみられなかつたが、配偶体の着生は良好であつた。

キ 結果

芽出し処理の結果はユーレイボヤの大発生、ウミウシの幼体の着生等によりわかめ幼芽の発芽が制えられ、殆んどが不良であつた。

11月25日まで海中吊下して発芽を待つたが、以後新芽は出ず打切つた。種苗として出



したものは約 $\frac{1}{3}$ の 3.130m であつた。なお配布した漁協名及び数量は才 1 表の通りである。

才 1 表 配布実績

組 合 名	数 量
渡 津	100
下 佐 脇	100
三 谷	300
味 沢	100
御 馬	30
佐 久 島	200
大 塚	200
伊 川 津	700
吉 田	500

ク 本年の失敗原因について

本年は配偶体の成育が順調であつたにもかかわらず種苗生産を失敗したが、これは芽出し処理の失敗が原因で、その理由としては次のことが考えられた。

(ア) 芽出し時期の撰定の間違い

昨年は9月中旬に同じ場所で行つたものが最も良好であつたため、本年も9月14日に行つたが、結果的には時期が早すぎ、ユーレイボヤ等の雑生物付着をまねいた。

(イ) 漁場環境の変化

昨年と同じ場所で行つたものであるが、本年は国体のヨットハーバー造成が行われたため三谷港とヨットハーバーの突堤にはさまつて水流が著しく鈍化していた。

(ウ) 枠の糸間隔の狭さ

枠にまきつけた糸と糸の間隔が狭かつたため、水の通りが悪く、これがまたユーレイボヤ等の着生を誘発した。

5. 浅海貝類保護水面調査

1. 豊橋地区

A ア 調査年月日 昭和39年5月20日

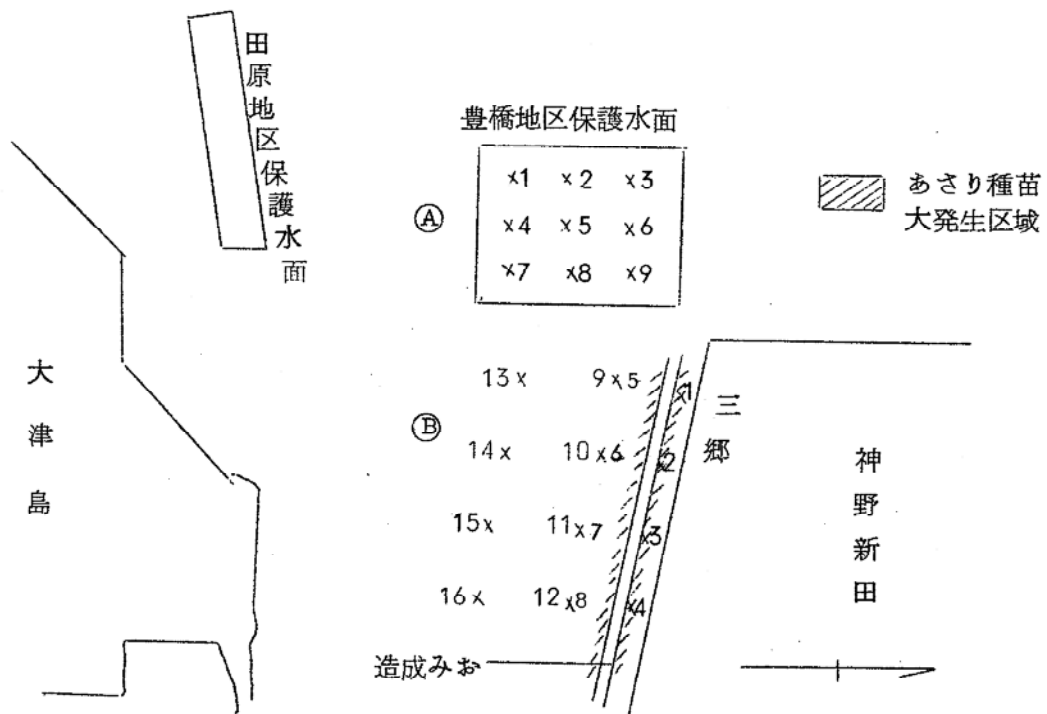
イ 調査場所 豊橋地区保護水面内

ウ 調査方法

この地区の保護水面は最干潮時水深0.5m～1.2mの無干出の水域で、そのため資料は船上より長柄のひしやくで底表土をかきとり、そのうちの1ℓ中のアサリ量を調べた。調査地点はオ1図Aのように200m間隔毎に9点を撰んだ。

エ 調査結果

オ1図 保護水面調査地点



結果は次のとおりである。

地 点	水 深 (m)	底 質	ア サ リ 量	備 考
1	1.3	砂	大型 3	貝 殻 破 片 多
2	1.2	砂	1	〃
3	1.3	砂	3	〃
4	1.0	砂 泥	2	サ ル ボ ウ 多
5	0.8	砂	5	〃 腐 泥 質 多
6	0.5	砂	3	〃 〃
7	0.5	泥 砂	4	〃 〃
8	0.5	泥 砂	4	〃 〃
9	0.5	泥 砂	6	〃 〃

註：大型 → 殻長 30 mm 以上のもの

地点 1～9 のいずれも殻長 30 mm 以上の大型アサリは多数見られたが、稚貝及び中型のものは殆んどなかった。この地域はかつてアサリ稚貝の発生場場所であつたが、近年種苗発生量は漸減し、特に本年は皆無であつた。

なお大型貝が存在する理由は地元組合でこの水域へ他地区で発生したアサリ種苗を撒布し養殖を図つたため、この地区で発生したものではない。しかしこの地区は大型アサリの生育にはむしろ適していると考えられ、良質のアサリが生産されている。

B ア 調査年月日 昭和 39 年 5 月 28 日

イ 調査場所 豊橋地区保護水面東側
神野新田南側航路

ウ 調査方法

干出時、オ 1 図 ㊸ の地点において 20 cm × 20 cm 四角内の表土 (約 5 cm 深) をとり、その中のアサリ量を調べた。

エ 調査結果

地点	表土	ア サ リ 量				備考
1	砂	中型 6 2.	小型 8 2.	微小多数		みお傾斜部
2	"	" 5 1.	" 6 9.	"		"
3	"	大型 2.	中型 6 8.	小型 8 3.	微小多数	"
4	"	中型 2 7.	小型 4 8.			"
5	"	大型 3.	中型 8 7.	小型 7 4.	微小多数	"
6	"	大型 5.	中型 6 8.	小型 6 5.	"	"
7	"	中型 5 9.	小型 4 2.			"
8	"	大型 4.	中型 4 0.	小型 5 1.	"	"
9	砂、泥	大型 8.	中型 2 8.	小型 1 5.	微小やゝ多	"
10	"	" 1 2.	" 3 2.	" 1 2.	" 多	"
11	"	" 7.	" 1 9.	" 1 4.	" 少	"
12	"	" 5.	" 1 1.	" 1 1.	" 少	"
13	泥分多	大型 7.	中型 1 9.	小型 1 3.	微小少	"
14	"	" 4.	" 2 4.	" 8.	"	"
15	"	" 5.	" 5.	" 6.	"	"
16	"	" 2.	" 7.	" 8.	"	"

註：大型、殻長 30 mm 以上 中型 15 ~ 30 mm 小型 5 ~ 15 mm
微小 5 mm <

この地域は豊橋地区保護水面東側に隣接する地域で、上流に柳生川があり、これを汚濁源として近年腐泥質が多くなり表土は黒色を呈して底質が悪化していた。昭和36年以降地元組合が才1図に示すように神野新田南側寄りにより作業用航路及びのり漁場の潮通し強化のため、しゅんせつ船によりみおを掘っていたが、その際排土の砂の一部がみおの週辺に沈澱し底面が新しい砂で覆われた。その結果この区域特にみお両脇の傾斜部(最干潮線付近)に稚貝が大発生した。この地区は保護水面の区域に比べると干出する点を除いて、発生条件ははるかに悪い筈であるが、それにもかかわらずこの地区に大発生したのは、みおの新造により新生底面が造成されたため、みおに近い程濃くなり、遠い程薄かった。

特にみお阿脇傾斜部のそれぞれ巾 3 m × 長さ 5 0 0 m の範囲は非常に濃密であつた。

(A . B . の考察)

豊橋地区保護水面は、かつてはアサリ種場として最も勝れた場所であつたが、近年発生量は漸減してきており、特に本年は皆無であつた。その理由は、この地区東側の上流に柳生川があり、これが近年益々汚れていたことと、のり養殖沖出化のため、水が緩流化されて、結果、腐泥が多く沈澱して底質が悪化し、稚貝生育に不適となつたためと考えられる。それはBで述べたように保護水面よりも更に条件の悪い地区でのみおの新造にともなう新生底面に稚貝が大発生したことからも理解されよう。この地域は一面ののり漁場であり、のりの養殖施設は9月～5月頃まであつて、これの緩流効果は事実上アサリラーバーの沈着に大きな役割を果している筈である。それにもかかわらず、A、Bの差が出たことは、つまり、アサリの発生要因は、アサリラーバーの沈着量よりもむしろアサリ稚貝の生残量の問題の方がより重要であることを意味していると考えられる。特に流れの速いみお阿脇の傾斜面に稚貝が大発生したことは、その最も良い例としてあげることが出来よう。また、保護水面の区域に種苗を撒いて養殖した場合良質のアサリ成貝を生産出来たことは、この区域がラーバーの沈着直後または微小稚貝の時代に生育不適であつたからで、恐らくこの時期のものが腐泥中に埋没して死滅するためと考えられる。アサリ種苗の発生手段として有効といわれている緩流装置の設置は今一度検討されるべきで、このように底質の悪化した漁場ではむしろ客工、耕耘、作濬等により生活環境を改善する事の方が有効と考えられる。

2. 田 原 地 区

調 査 概 要

この地域は大洲崎を削土して造成したのり漁場地帯で、底質は砂礫質で干出し、冬期には西～北西の風波を強く受けて水の動きが激しく、洲の移動も激しい所である。

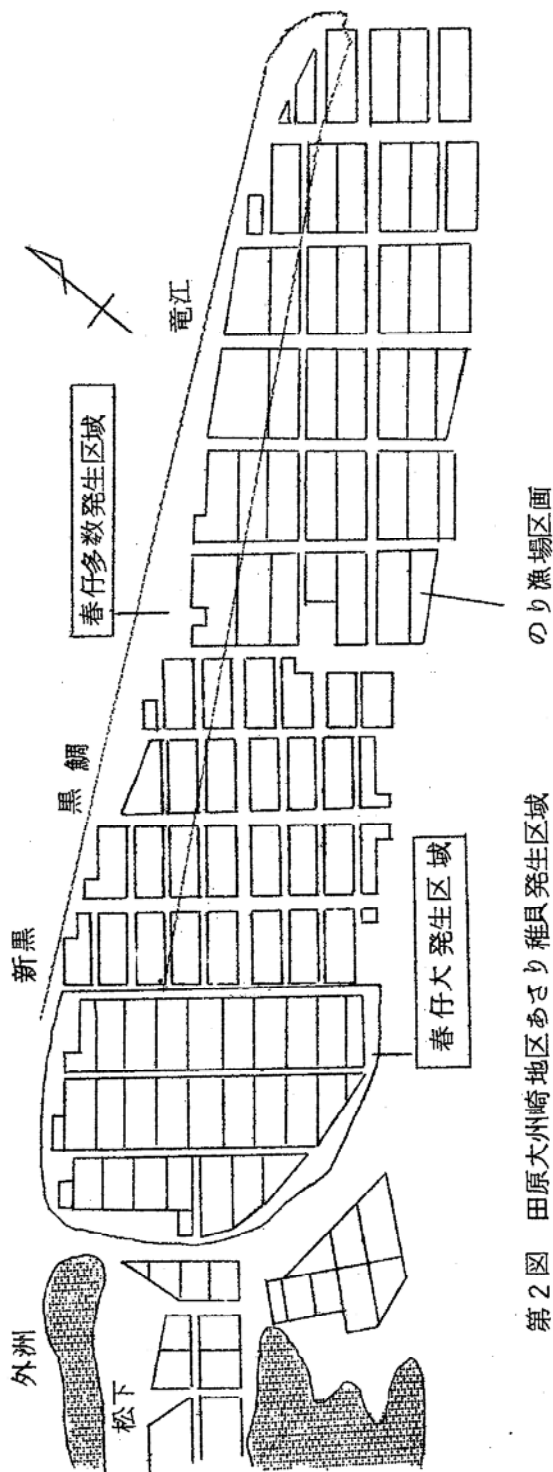
この地区は保護水面及びその周辺部一帯に周年非常に濃密にあさりの棲息がみられた。

特に現在新しく削土漁場造成している西南部一帯に稚貝が濃密に発生し、また沖寄りの水の動きの激しい地帯でも一面に稚貝発生がみられた。この地区の成貝の息は全面に至つて1㎡換算1,000～10,000ヶ程の濃密さで密棲しており、殆んどが変形貝で表面の模様がすれて認められない状態のものが多く、また、生長休止帯のところで極端に段のついたものが多い。一般にのり柵内に成貝の棲息量は多く、流れの速いみお筋には極端に少なくなつている。またあさりだけの土手状のかたまりが所々にみられるが、これは強風により洲が移動してあさが洗出吹寄せられるためと考えられる。この様な土手状にかたまつたあさは

弱っており、特に晴天が続いたりすると死滅し、干出時等腐敗臭が漁場に漂う場合もある。また密殖のためか、夏期には強い日照によつて干出時に地温が上り、そのため死亡するあさりも相当あるようである。

問題点

この地区は豊橋地区と異つて、風波強く絶えず洲の移動がみられ、また人為的に大洲崎が削土されて漁場が新造される等、底質がいつも最良の状態に保たれている。そのため稚貝の発生量、成貝棲息量ともに甚だ多く、その点では問題はないが、風波が強いため、あさり成貝の洗出吹寄せが起り、また貝自身も表面がすれ、あるいは変形したり、成長休止帯で極端に段がつく等、品質が劣る。従つてこの様な所では緩流装置の設置はあさりラバーの沈着を図るという意味ではなく、生育を保護するという意味に於て非常に有効と考えられる。またこの地区では夏期高温時の干出中に於ける損耗が想像以上に大きいと考えられる。そのため、夏期間中、網を張る等して蔭を作り、強日射を防いだり、あるいは無干出域へ移殖する等の方策を考える必要がある。



第2図 田原大洲崎地区あさり稚貝発生区域のりり漁場区画